

天主經

天てんに在います我等われらの父ちちや願ねがはくは爾なんぢの名なは聖せいとせられ爾なんぢの國くに
は來きたり爾なんぢの旨むねは天てんに行おこなはるるが如ごとく地ちにも行おこなはれん
我わが日にち用の糧かてを今日こんにち我等われらに與あたへ給たまへ我等われらに債おひめある者もの
を我われ等ら免ゆるすが如ごとく我等われらの債おひめを免ゆるし給たまへ我等われらを誘いざないに
導みちびかず猶なお我等われらを凶きよう悪あくより救すくい給たまへ。蓋けだし國くにと權けん能のうと光こう
榮えいは爾なんぢに世よ世よに歸きす。「アミン」

信經

我われ信しんず一ひとつの神かみ父ちち全ぜん能のう者しゃ天てんと地ち見みゆると見みえざる萬ばん物ぶつ
を造つくりし主しゅを。又また信しんず一ひとつの主しゅイイススハハリリスストトスス神かみ
の獨どく生せいの子こ萬よろづ世よの前さきに父ちちより生うまれ光ひかりよりの光ひかり眞まことの
神かみよりの眞まことの神かみ生うまれし者ものにて造つくられしに非あらず父ちちと
一いつ体たいにして萬ばん物ぶつ彼かれに造つくられ我われ等ら人ひと々びとの為ため又また我われ等らの救すくい
の為ために天てんより降くだり聖せい神しん及および童どう貞てい女じよママリリヤヤより身みを藉と

り人^{ひと}と為^なり我^{われ}等^らの為^{ため}にポンテイイピラトの時^{とき}十字^{じゆうじ}
架^かに釘^{くぎ}うたれ苦^{くる}しみを受け葬^{ほうむ}られ第三^{だいさん}日に聖^{せい}書^{しよ}に叶^{かな}
うて復^{ふく}活^{かつ}し天^{てん}に升^{のぼ}り父^{ちち}の右^{みぎ}に坐^ざし光^{こう}榮^{えい}を躡^あして生^いけ
る者^{もの}と死^しせし者^{もの}を審^{しん}判^{ばん}する為^{ため}に還^また來^{きた}りその國^{くに}終^{おは}り
なからんを。又^{また}信^{しん}ず聖^{せい}神^{しん}主^{しゅ}生^い命^{めい}を施^ほどす者^{もの}父^{ちち}より出^いで
父^{ちち}及^{およ}び子^こと共^{とも}に拜^{おが}まれ讚^ほめられ預^よ言^{げん}者^{しゃ}を以^{もつ}て嘗^{かつ}て言^い
いしを。又^{また}信^{しん}ず一^{ひとつ}の聖^{せい}なる公^おなる使^し徒^との教^き會^{かい}を。我^{われ}
認^みむ一^{ひとつ}の洗^{せん}禮^{れい}以^{もつ}て罪^{つみ}の赦^{ゆる}しを得^うるを。我^{われ}望^{のぞ}む死^し者^{しゃ}の復^{ふく}

活かつ並ならびに來らい世せいの生いの命ちを。「アミン」

天の王

天てんの王おう慰なぐさむる者ものや眞しん實じつの神しん在あらざる所ところなき者もの満みたざ
る所ところなき者ものや萬ばん全ぜんの寶ほう藏ぞうなる者もの生せい命めいを賜たまふの主しゅや來きたり
て我われ等らの中うちに居おり我われ等らを諸もろ々の穢けがれれより潔いさぎよくせよ至し
善ぜん者しやや我われ等らの靈たましひを救すくい給たまへ

第五十聖詠

神かみや爾なんぢの大おほいいなる憐あはれみに因よりて我われを憐あはれみ爾なんぢが恵めぐみの多おほき
に因よりて我われの不法ふほうを抹けし給たまへ屢しばしば々我われを我われが不法ふほうより
洗あらい我われを我われが罪つみより清きよめ給たまへ蓋けだし我われは我われが不法ふほうを知る
我われの罪つみは常つねに我われが前まえに在あり我われは爾なんぢ獨ひとり爾なんぢに罪つみを犯おかし悪あく
を爾なんぢの目めの前まえに行おこなへり爾なんぢは爾なんぢの審断しんだんに義ぎにして爾なんぢの
裁判さいばんに公おほやけなり夫それ我われは不法ふほうに於おいて妊はらまれ我われが母ははは罪つみ

に於て我を生めり夫れ爾は心に眞實のあるを愛し我
が衷に於て智慧を我に顕せり「イソプ」を以て我に
沃げよ然せば我潔くならん我を滌えよ然せば我雪
より白くならん我に喜びと樂とを聞かし給へよ然せ
ば爾に折られし骨は欣ばん爾の顔を我が罪より避け
我が盞くの不法を抹し給へ神や清潔き心を我に造り
正直き靈を我の衷に改め給へ我を爾の顔より逐うこ
と勿れ爾の聖神を我より取り上ぐるこ勿れ爾が救

ひいの喜よろこびを我われに還かえし主宰しゅざいたるの神しんを以もつて我われを固かため給たま
へ我われ不法ふほうの者ものに爾なんぢの道みちを教をしへん不ふ虔けんの者ものは爾なんぢに歸かへら
んとす神かみや我われが救すくひの神かみや我われを血ちより救すくひ給たまへ然しかせ
ば我われが舌したは爾なんぢの義ぎを讚ほめ揚あげん主しゅや我われが唇くちびるを啓ひらけよ然しか
せば我われが口くちは爾なんぢの讚さん美びを揚あげんとす蓋けだし爾なんぢは祭まつりを欲ほつせ
ず欲ほつすれば我われ之これを獻たてまつらん爾なんぢは燔やき祭まつりを喜よろこばず神かみに喜よろこば
るゝの祭まつりは痛つう悔かいの靈たましひなり痛つう悔かいして謙けん遜そんなるの心こころは神かみ
や爾なんぢ輕かろんじ給たまはず主しゅや爾なんぢの恵めぐみに因よりて恩おんをシオンシオンに垂たれ

イエルサリムの城垣を建て給へ其の時に爾義の祭献
物と燔祭とを喜び饗けん其の時に人々爾の祭壇に犢
を奠えんとす。

エフレムの祝文

主吾が生命の主宰や怠惰と愁悶と陵駕と空談の情を
我に與ふる勿れ。
大拜一次

貞操みさをと謙遜へりくだりと忍耐こらへと愛あいの情こころを我爾われなんぢの僕ぼく（婢ひ）に與あたへ給たまへ。
大拜一次

嗚呼ああ主王しゅおうや我われに我わが罪つみを見我わが兄弟けいていを議ぎせざるを賜たまへよ。蓋爾けだしなんぢは世々よよに崇讚あがめほめらる「アミン」大拜一次

神かみや我われ罪人ざいにんを淨きよめ給たまへ
十二次、毎次小拜

主吾しゅわが生命いのちの云々

常に福

常に福つね さいはひにして全まく玷きずなき生神女しょうしんじよ吾わが神かみの母ははなる爾なんぢを
福さいはひなりと稱とふるは眞まことに當あたれりヘルウイムより尊たふとくセ
ラフイムらふいむに並ならびなく榮さかえ貞操みさをを壞やぶらずして神言かみことばを生う
みし實じつの生神女しょうしんじよたる爾なんぢを崇讚あがめほむ